

第13章 疾病と開発

1. 疫病は歴史的にどのような影響をわれわれの社会と経済にもたらしてきたか

2019年12月に海外において**新型肺炎 COVID-19**（新型コロナ・ウィルス、SARS-CoV-2）の感染者が報告され、日本では2020年1月に横浜港を出港した大型客船ダイヤモンド・プリンセスにおいて感染が報告された（NIID 国立感染症研究所）。未知の感染症の日本国内への侵入を防ごうと多くの努力が試みられたが、この感染症はグローバル化の進展をわれわれに見せつけるかのようになり、日本を含め世界中に拡大した。日本でも2020年を皮切りに何度か東京など大都市を中心に緊急事態宣言が出され、夜間の飲食店の営業停止、学校のオンライン授業化、また、外出制限などさまざまな措置が講じられた。各種制限に伴う経済悪化に対しては、政府の多様な支援も採られはしたものの、飲食店をはじめとして廃業に追い込まれた企業も多い。その後、3年が経過し、ワクチンの開発に支えられて経済を動かしていく方策が採られたが、ウィルスは変異して数回の流行を繰り返し、2023年になっても感染が完全に収まる気配は見られない。

新型コロナ・ウィルスは、わたしたちの生活を大きく変えた。これまで、9時から17時まで出社して働くということは当たり前であると考えられてきたが、この常識を良くも悪くも覆し、「在宅勤務」という働き方や、働く場所にとらわれない、「ワーケーション」という勤務方法も生み出した。また、さまざまな分野でのオンライン化を推し進める役割も果たした。

これ以前にも2003年にはSARSが流行して、わたしたちの生活を脅かした。経済発展とともに医療技術も進歩してきたが、疫病は変異して存在し続けている。特効薬が開発されていない疫病の流行はひとびとを死に追いやり、また、

社会的不安は時に出生数を減らして人口減少につながった。エンデミック（風土病）に対して、エピソード（伝染病）そしてパンデミック（疫病の大流行）は、文明の消滅につながることもある。疫病は大きな被害を歴史的にもたらしてきたが、死亡数の増加や出生数の減少によって労働供給が減少するため、皮肉にも生き残った人には働く場所が確保されたり労働賃金が上昇したりするということもある。

疫病がどのようにして拡大するかは、病原菌を何が媒介して、人がどのように感染するのかによる。感染は病原菌を保有する人や媒介する虫・動物との接触などにより生じ、特に経済開発などにより、従来は遭遇しなかった社会と接触すると感染が広がる。人口密度が高い地域では感染速度も速くなり、流行は勢いづく。

図表 13 - 1 は、これまでに社会に大きな影響を与えてきた感染症の流行を加藤がまとめた『人類と感染症の歴史』（2013）掲載の表に MPH オンラインなどから若干の加筆を施したものである。以下、多くの部分でこの本を参考している。

2. 国家や都市の壊滅と疾病

世界史の教科書でも常に大きく取り上げられている疫病として、ヨーロッパを襲った**黒死病**（ペスト、14世紀）がある。ペストは鼠などを宿主とし、そこに生息するノミが媒介する。ノミは毛皮などにも紛れ込み、人へとペストを媒介する。黒死病は、1346年に黒海に臨むカーファで確認され、1347年にはアナトリア地方と地中海沿岸に広まり、1348年にはローマ、パリとしいに内陸部で確認されていった。1348年にはドーヴァー海峡を渡り、1350年になるとスコットランドも圏内に収めている（図表 13 - 2）。すなわち、貿易など人の移動のルートは黒死病がひろがっていったルートでもある、ということだ。このような貿易ルートにおけるペストの流行は、イスラーム社会ではマムルーク朝を衰退させることにつながったという（加藤 2013）。この黒死病の初発として、1334年に中国杭州で流行した悪疫がペストではないかとも考えられている。

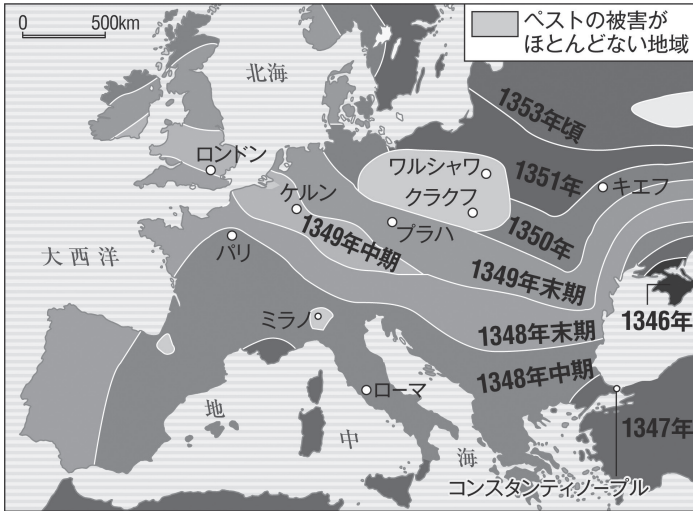
図表 13 - 1 世界に大きな影響を与えた感染症

時代	感染症名	流行の理由
2 世紀	アントニン・ペスト	小アジア・エジプト・ギリシャ・イタリアにひろがる。天然痘もしくは麻疹であると考えられているが、真の病名は不明。メソポタミアから帰還した兵士によってローマに持ち込まれた
6 世紀	腺ペスト	ビザンチン帝国と地中海の港湾都市にひろがる
13 世紀	ハンセン病	熱帯の風土病が十字軍の移動でヨーロッパにひろがる
14 世紀	ペスト (黒死病)	アジア、ヨーロッパ、アフリカにクマネズミの移動とノミによってひろがる
15 世紀	梅毒	大航海時代にアメリカ大陸からヨーロッパにひろがる。ルネサンスの性の解放で拍車がかかる
17～ 18 世紀	天然痘 (ほうそう)	発生地はインドあたりと推定される。仏教伝播によりシルクロード経由で拡散した。インカ帝国を滅亡させた要因のひとつでもある。WHO（世界保健機関）によって世界撲滅宣言（1980）が出された唯一の感染症
19 世紀	結核	産業革命時の過酷な労働条件や都市への人口の転入が流行の背景に存在
19 世紀	コレラ	ガンジス河流域が発生地と考えられ、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、北アメリカへひろがる
19 世紀	発疹チフス	ナポレオンのロシア遠征、クリミア戦争、第一次世界大戦、ロシア革命で流行
20 世紀	コレラ	インドで発生、中東、北アフリカ、東ヨーロッパ、ロシアにひろがる
20 世紀	インフルエンザ	密集した集団生活と迅速な輸送手段で急拡散。1918～1920年のスペイン・インフルエンザは世界を席卷
20 世紀	インフルエンザ	アジアインフルエンザ。1956年に中国で発生し1958年まで続いた。シンガポール、香港、アメリカで流行
20 世紀	HIV	アフリカの風土病が都市開発により世界的にひろがる。1980年代にアメリカで確認され急増
21 世紀	SARS	コロナ・ウィルスが原因。中国南部の広東省からひろがる。
21 世紀	COVID-19 (新型コロナウイルス、 SARS-CoV-2)	2019年に最初の感染者が見つかる。世界中にひろがる

出所：加藤（2013）表 1. 2. MPH オンラインをもとに筆者作成

ペストは、14世紀末までに3回の大流行と多くの小流行とを繰り返し、猛威を振るった。全世界で8500万人、当時のヨーロッパの人口の3分の1から3分の2（約2000～3000万人）が死亡したと推定される。2000の村と農地にお

図表 13 - 2 ペストの広がり



出所：山川&二宮 ICT ライブラリ

いて人口が激減し、農奴不足が続いていたヨーロッパの荘園制に大きな影響を及ぼした（図表 13 - 3）。そのため、イギリスでは農業が労働集約的な穀物の栽培から、多くの人手を必要としない羊の放牧へとその中心が移ったともいわれる。疫病による人口減少は、農奴から小作農へと農民の地位を向上させることにもつながった。

ジャレド・ダイヤモンドは、16世紀にフランシスコ・ピサロ（1478?-1541）がインカ帝国（図表 13 - 4）を滅ぼすことができた理由について以下のように説明する（ダイヤモンド 2000, p. 114）。

インカ皇帝であったアタワルパ（1502?-1533）とその軍隊は、1532年にインカ帝国の内部対立によって生じた内戦の行方を決する戦いに勝利した。その後、敵方の拠点であったクスコを占領していた仲間に合流しようとした。その際、現在ペルー北部の都市であるカハマルカで、ピサロに率いられたスペインの征服者たちと遭遇して捕らえられ、最終的には命を落とした。アタワルパが敗北した原因として、ヨーロッパ軍勢に比べて馬なども持たずに武器が劣って

図表 13 - 3 死の勝利 (ピーテル・ブリューゲル, 1562 年頃)



出所：プラド美術館所蔵

図表 13 - 4 インカ帝国の遺跡 (マチュ・ピチュ)



いたことも挙げられる。だが、実のところインカ帝国は、内戦で分裂し全土が混沌としていた。この内戦の原因は、パナマとコロンビアに移住してきたスペイン人が持ち込んだ天然痘にあるといわれる。エルナン・コルテス (1485-1547)